ハイスクールD×D 白銀の少女

腐ってない女子

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ルシファーの血を受け継ぐ少女がいた。その少女は辛い過去を持っていた。その過去の記憶から救ったのは・・

目次

1話 1

1話

「おはよう。ヴァーリ！」
「今日も来たんだ。イッセー？態々、私のところに来なくてもいいよ？」
「ううん。ちゃんと、来てるか確認しに来たんだから・・」
「そっか。」
　そう。イッセーは毎日ここに来て、私に会ってから、教室に行くのだ。態々、来なくてもと言うが、確認と言って、毎日来るのだ。
「ヴァーリも教室に行こうよ！みんな、待ってるよ？」
「うん。気が向いたら、行くよ。」
「そんなこと言って、絶対来ないじゃん！」
　毎日このような会話をしてはイッセーは落ち込んでいる。可哀想だけど、落ち込んでいるイッセーはすごい可愛い。
「むぅ！なんで、いつも私の頭を撫でるの？」
「ごめんごめん。でも、イッセーが可愛いのがいけないんだよ。」
「うう！私は別にそんな・・・」

「はい！ヴァーリ。私の頭を撫でたんだから、教室に行きましょう！」
　あ！騙された。くそう・・・無念・・くはっ！
「ヴァーリ？どうしたの？」
「ちょっと、おなかが痛くなったから、お手洗いに・・」
　そう言って、逃げようとしたら、腕を引っ張られた。
「うそでしょ？私もそんな簡単に騙されないよ？」
「はい・・・すいませんでした。でも、今日だけだからね？」
「うん！」
　そんなことがあり、教室に向かった。
「きゃあ！ヴァーリさんよ！今日も綺麗だわ！それに我らの癒しである。イッセーさんも一緒に・・・」
「やっぱり、ヴァーリがいると、騒がしさがいつも以上だね。」
「違うよ。イッセーが可愛いからよ。」
　そんなことを話しながら、教室に入った。
「おはよう！みんな」
「おはよう。」
「「おはよう！イッセー、ヴァーリさん」」

なぜ、イッセーは呼び捨てで私は、さん付け？まぁ別にいいけど・・

「それより、今日はヴァーリさんも来たんだね。」

「うん。イッセーに騙されて・・・」

「ひどいよ！ヴァーリぃ。別に騙してないのに・・」

やばい！イッセーが泣いてしまう。イッセーが泣いたら、裏で動いている。イッセーを愛し隊の人たちに何をされるかわからない。

「ごめん。イッセー！謝るから、泣かないで！」

「本当？」

「もちろん！」

「うん！」

イッセーは涙目ながらも、眩しすぎる笑顔でこちらを見てきた。やばい！なぜか、抱きしめたくなる。そんなことを考えていると、無意識にイッセーを抱きしめてしまった。

「ヴァーリ？あうっ！」

「「きゃあ！ヴァーリさんとイッセーが抱き合っているわ！誰か、写真よ。高く売れるわ！」」

「やばい！分厚い本がまた分厚くなるわ。」

ちょおっとまった。分厚い本について、じっくりとＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩしないといけないね。
「その、ヴァーリ?まだ?」
「うん。もう少しだけ・・・」
イッセーは顔を真っ赤にして、私に問いかけた。
「おーい!授業を始めるぞ!席に着け。おっと、これは失礼・・少し待っていよう。」
「いや、先生・・・止めてくださいよ。恥ずかしくて死にそうです。」
「無理だ。こんな貴重な時間をなくすなんて・・・私にはできない。」
「ほんとに恥ずかしいから、もうやめてよぉ!」
「仕方ないなぁ。これで我慢しよう。」
そう言って、私はイッセーの額にキスをした。
「じゃあ、先生。授業を始めてください。」
「おう!おいお前ら!席につけ。松田と元浜は後で職員室に来い!」
「「なぜ!?」」
「じゃあ、授業を始める。」
そんな感じで授業が始まり、みんな静かになったところで、私はヘッドホンをした。
気づいたら、目を閉じ、眠りついていた。

「リ!ヴァーリ!」
　イッセーの声が聞こえる。しかし、目を開けられない。そして、とても体が重い、なぜだろう・・・
「ヴァーリ!大丈夫?」
　やっと目を開けて、体を動かすことができた。
「ずっとうなされてたよ?クラスの子も心配してたし・・・それに、すごい汗だよ?大丈夫?」
「うん。平気」
　立とうとすると、立ちくらみがして、うまく立てない。
「ヴァーリ?大丈夫?家まで送るよ?」
「うん。悪いけど、お願い。」
「うん!」
　イッセーの肩を貸してもらい、校門まで行くと、声が聞こえた。
「あの!兵藤一誠さんですよね?私、天野夕麻っていいます。」
「うん。そうだけど・・」
「やっぱり、あの・・・貴方のことが好きです!付き合って下さい。」
「えっと・・女の子だよね?」

「はい・・・でも、その・・」
　この気配は・・・堕天使ね。イッセーの神器を狙ったのかしら・・
「ごめん・・なさいね。イッセーは私と・・付き合っているから・・」
「そうなんですか?」
「えーと・・」
　私は話を合わせなさいと言うように、イッセーの服を引っ張った。
「そうなんです。私たち付き合っているんです。だから、ごめんなさい。」
「じゃあ・・私たち、急いでいるから・・・」
　この場はお願いだから、見逃してくださいな。
「待ちなさいよ。逃がすわけがないでしょ!」
　くそぉ・・・やっぱり逃がしてはくれないか・・
「何?」
「貴方にいい思いさせてあげてから殺そうと思ったのに・・まぁ、いいわ。今殺すしね。」
　そう言って、堕天使は光の槍を生成した。
「イッセー・・私の後ろに・・」
「でも・・」
「大丈夫。私は・・」

「・・わかった。」
　イッセーは素直に私の後ろにってくれた。その間にも、堕天使が生成している槍はどんどん大きくなっている。
「ふん。貴方、苦しそうだけど、大丈夫?まあ、どちらにしろ助からないけど・・」
　そのようなことを言って、生成した槍を投擲した。イッセーを守るためならいっか・・
「来て。アルビオン!」
〈了解した。〉
　投擲された槍は私が発動した神器によって阻まれた。
「な!?貴様、まさか、白龍皇!?」
「残念だけど・・そうゆうことよ。」
　少しだけ、魔力を開放して、相手に放った。その魔力弾は堕天使に当たると、堕天使が一瞬で吹っ飛んだ。
「イッセー・・説明は後でする。だから、いまは帰るよ。イッセーの家にお邪魔してもいい?
「うん。でも、それより、早く休まないと・・ヴァーリすごい顔色が悪いよ。」
「大丈夫・・すぐに治るから・・とりあえず、行きましょう。」
「うん。」

そう言って、イッセーの家に向かった。イッセーの家は学園から近く、私の家よりも近いので、すぐについた。
「少し待ってて、お茶いれるから・・」
「うん・・ありがとう。」
「あ、いいよ。適当に座っててね。」
「わかった。」
イッセーは部屋を出て、お茶を入れに行った。一応、結界とか張ってたほうがいいよね?そう思い、魔力をつかって、結界を張った。
「ヴァーリ、おまたせ。茶葉が少なくて、薄いかもしれないけど・・」
「うん。ありがとう!」
「それで、ヴァーリ。さっきのは何?」
「あれは、堕天使だよ。」
「堕天使?」
「そう。」
イッセーは興味深そうに聞いた。だが、これを聞いてしまっては二度と、元の世界には戻れない。
「イッセー。まず、この世界には神、悪魔、堕天使、人間、妖怪、ドラゴン等、色々な種

類の生き物がいる。さっき襲ってきたのは堕天使よ。堕天使は神側の天使などが堕ちた者。そして、悪魔は身近にいるわ。この際だから言っておくね・・私は悪魔だよ。そして、ほかにも有名なリアス・グレモリー・・それから支取蒼那も悪魔よ。ごほっ!ごめんなさい。今日はここまでいいかしら?」
「うん。大丈夫だよ!でも、とりあえず、話してくれてありがとう。」
「うん。」
「ごめんね。まだ、続きは明日にでも、話すから・・」
「わかった。今日は泊まっていっていいよ。」
「うん。泊まらせてもらうね。」
「お風呂を沸かしといたから、入っていいよ。」
「うん。」
　そういえば、着替えないよね。イッセー、貸してくれるかね?
「着替えがないよね・・下着なら、かしてあげるよ?」
「イッセーのじゃ、サイズがねぇ・・」
「貧乳ですよーだ!」
　そう言って、イッセーは落ち込んでしまった。
「イッセー、貧乳はステータスだって、言ってる人がいたよ?」

「そうなんだ。いいよね、ヴァーリは大きくて・・」
「それは、私は半分悪魔だし・・・」
「やっぱり、悪魔は魅力的だよね。」
　そんな話をした後は何もなく1日が終わった。